

謎が多い動物カバ

アニマルフォトグラファー
トラベルライター

平 岩 雅 代

アフリカの川や湖に暮らすカバほど謎が多い動物は、いないでしょう。

英語名のヒポポタマス (Hippopotamus) は、古代ギリシャ語の“河の馬”に由来するといわれますが、これは水面上に頭の半分だけを出した姿を見て名付けられた、とされます。

カバは澄んだ清らかな水の流れを好み、太陽が昇っている日中のほとんどの時間を、水中で過ごします。さすがに出産こそ水際で日没後から夜半に行いますが、授乳は水中。交尾も水中です。カバはほ乳類の動物なので、呼吸をするため2~4分にほぼ1回の割合で頭を上げ、酸素をたっぷり吸い込み、またブクブク沈みます。面白いことに水中では、カバの耳、鼻、まぶたはピタリ閉じ

てブタをすることができ、水が入らない構造になっているのですから、恐れ入ります。

カバの体長は3メートルから5メートル。体重は1.5トンから3トンにもなり、アフリカでは、ゾウに次いで2番目に大きい動物です。

昼間見るカバは、水中に巨体を沈めていることが多いため、ほとんどの人はカバのことをおとなしい動物だと思っているようですが、ひとたび自分の領域を侵されそうになれば、猛然と敵に立ち向かっていきます。

オス同士の闘いは、見ていて思わず手に汗を握るほど。水しぶきを派手にあげて体じゅうで相手に向かいます。時には大きなキバで噛みつかれ、大怪我をするカバもいます。

ところでカバが自分の縄張りを主張する方法のひとつに“マーキング”というものがあります。これは自分の排泄物をあたり構わずまき散らし、「ここまでは俺の土地だ」と主張するものです。ただカバは地上の丈の短い草を好んで食べ、稀に水草も食べる“菜食主義者”ですので、マーキングの跡

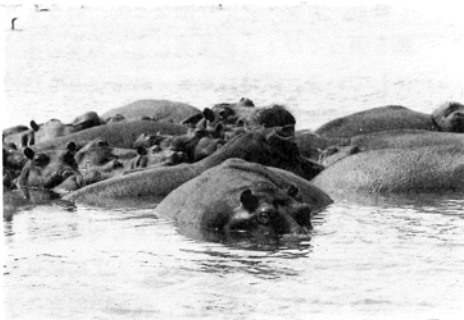


写真1 水中のカバは動かず、頭だけを出している

を見ても余り不潔な印象は受けません。

カバが水中を好む理由は、重い体重を水中の浮力で軽減させるためとも、ほとんど体毛のない背中や皮膚を強烈なアフリカの太陽から守り、乾燥を防ぐため、ともいわれています。

カバを見ることができる川や湖は、東アフリカの各地にあります。アミン将軍の独裁政治以前は、ウガンダのマーチソン・フォールズ(旧名はカバレガ・フォールズ)国立公園が、カバの密集している地域として、世界中の動物ファンの間で有名でした。残念ながらアミン独裁時代と、その後の食料難の時には多くのカバが殺され、人々の食料にされてしまったということです。

現在“佃煮のように”たくさんのカバが暮らしているのは、ケニアのマラ・リバー、タンザニアのマニヤラ湖、同じくンゴロンゴロ火口原の中にある泉ですが、ケニアのアンボセリでは、湿地の中に半ば泥んこ状態のカバを、さらにムジマ・スプリングスという湧き水の泉では、無色透明の澄み切った水の中を悠々と泳ぐ(水底を足で蹴って進む!?)カバを見ることができます。特にムジマ・スプリングスには、泉のほぼ中央部分に突き出したガラス張りの水中展望室があり、珍しいカバの生態を目近かに観察すること



写真2 母親の後をついて行く子どもの姿も瓜二ツ

ができ、観光客の間で好評です。

ところでカバがよく見せる“アクビ”ですが、実際は自分を強く見せるための“威嚇”だということ、別に眠いわけではないそうです。水中のカバはほとんど目立った動きをせずに、起きているのか眠っているのか、ほとんどわからない状態です。

せめて少しでも迫力のあるカバの姿をカメラに収めたいと思い、重く大きい望遠レンズ付きのカメラを構えて「今か、今か」と待つのですが、空振りに終わってしまうことも少なくありません。しかし相手は野生動物のこと。“短気は損気”という意味の現地の格言に従って、あわてず、あせらず、ゆっくり、のんびり気長に待つより他はないようです。

〈カバひとくちメモ〉

▶東アフリカ各国(ケニア、タンザニア、ウガンダなど)で話されている公用語のスワヒリ語で、カバは“キボコ”と呼ばれている。

▶野生のカバの寿命はオス、メスとも

に40年ほど。生まれて3～4年で成獣になる。誕生時の体重は30kg前後。

▶戦う際の武器になる牙は、通常下アゴに4本生え、年齢とともに長くカーブする。

▶捕食はおもに夜間、陸上で行われる。